1998年1月

自由南アフリカの声 No16

Voice of Free South Africa　発行　アジア・アフリカと共に歩む会
Published by Together with Africa and Asia Association (TAAA)

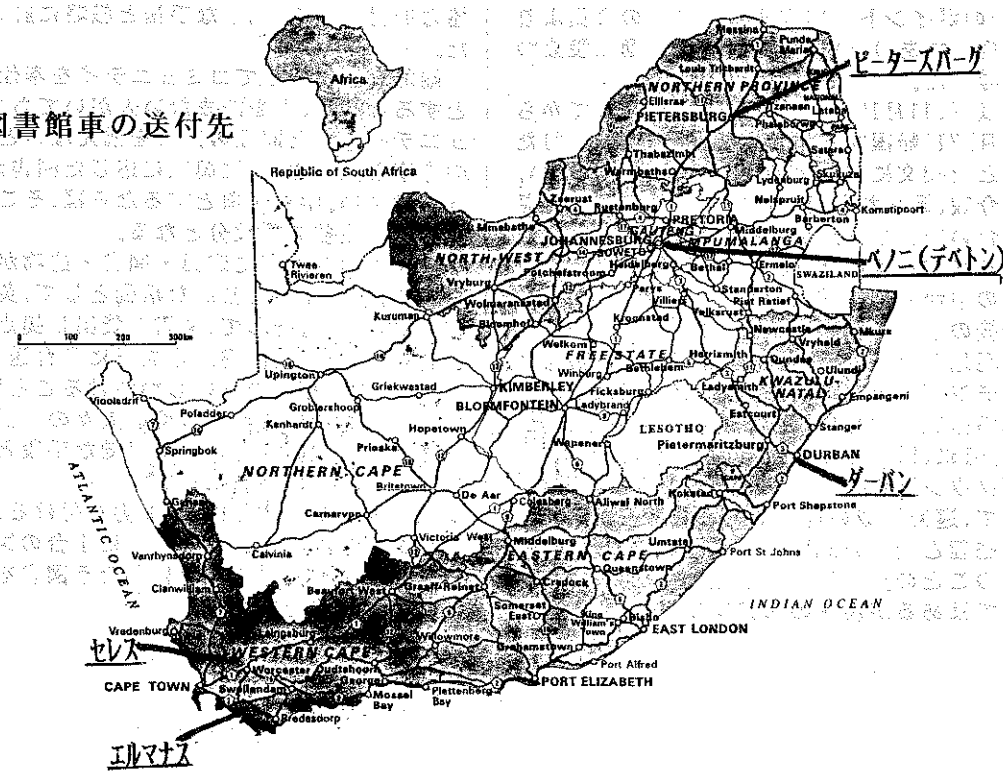
1998年1月の報告と予定

- ■1997年11月車3台が南ア到着
- ■11月TAAA南アの3カ所を訪問
- ■南ア、ハウテン州教育局がTAAA送付の移動図書館活動に乗り出す。
- ■1998年2月浦和市にて報告会
- ■4～6月にハウテン州へ車を送る。

目次

南ア訪問メンバーに加わって …… 2
南ア移動図書館車活動報告 …… 3
南アフリカ再訪記 …… 7

移動図書館車の送付先



南ア訪問メンバーに加わって

埼玉県立熊谷図書館　北爪健一

訪問日程　＊は関係者とミーティング

11/19水	成田発（シンガポール経由）	
11/20木	（ジョハネスバーグ経由）ケープタウン	＊NGO-Masifundise事務所
11/21金	セレス（ケープから120キロ）	＊黒人居住区コミュニテイセンター、小学校　（図書館車いずみ号と対面）
11/22土	エルマナス（ケープより164キロ）	＊黒人居住区のコミュニテイセンター
11/23日	ダーバン	ジェーン宅、ヒンズー寺院、植物園　（図書館車しらこばと号と対面）
11/24月	ダーバン	黒人居住区の小学校、＊NGO-ELET事務所、ELETの卒業式参加
11/25水	ジョハネスバーグ	デベトン中学校（まつの木号と対面）NGO-MEI代表宅、＊ハウテシ州教育局
11/26木	ジョハネスバーグ発	
11/27木	成田着	

97年３月、ELETの幹部職員Jane Jacksonの研修受け入れが縁となり、TAAA（アジア・アフリカと共に歩む会）の主活動である図書の選定・梱包の作業に何度か参加し、そして野田代表の要請を受けて南アフリカ訪問メンバー４人の中に加えていただいた。長い活動歴の会員諸氏を押し退けての参加は、会の崇高な理念から身に余る想いであり、然るに目的にどれだけ役立つことができるか一抹の不安もあった。しかし、私の日常業務とする移動図書館の運行を当地へ導入させることについてそのポイントを掌握する目は他の会員よりも容易であり、今後の歩む会の活動に役立つと考えた。

以下、11月19日（水）に成田を出発してから11月27日帰国するまでに見聞きし、感じ得たことを拙文にまとめ会員への報告としたい。

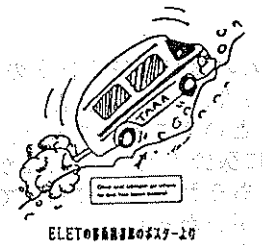
今般、限られた日程の中で５つの団体と話し合いを持ち、それら主催者の感謝と期待により交友を深めた。幾つかの要望も寄せられ、その中から図書館員の目で捉えた課題として今後の重点活動の一つとしたい。

現地NGOの２団体（Masifundise・ELET）とハウテン州教育局（MEIを継承）が一様な貸出し準備体制ではないことが気掛かりとして残った。特に、97年１１月に車両を受け入れたケープタウン近郊の二つのコミュニテイの状況として、巡回地域の選定に熱心であったが、図書の整理と貸出方式にまで話題が上らなかった。このことの要因は図書不足に他ならない。杞憂ではあるが現在の南アフリカは、わが国の近代農村が経験した様に読書自体、生活余裕者か知識人のものであり、黒人居住区の住民全てのものとしない一部の人のものでしかないとも推測できる。しかし、この問題は図書の物量と成人への読書普及で解決する他ない。MEIでは歩む会の図書の供給量を予測できたとも考えられ、奉仕対象を学校に絞り込んできた。そして、図書の供給に合わせて学校数の拡大を図ってきた。その地道で堅実な活動に州教育局が加わった形であり、更に、州当局ではシステム拡大を目指してプレトリア図書館の協力を得ている。見事な手法と戦略に脱帽した。

端的な事例としてコミュニテイを奉仕対象とするならば、本を読まない人がいてもコミュニテイ人口と同数の図書を揃えないと住民の識字と読書力、更に興味に応じた図書が選択できない。学校対象とするならば、そこに通う児童・生徒の人数分となる。

図書館の３要素に職員・図書・建物が挙げられる。歩む会の日常的な活動として、英語図書を送り続け、そして、図書の貸出し拠点となる建物に代えて、図書館車を既に７台送ってきた。二つの要素を供給しつづけることは、長い間格差を強いられた多くの人々の「識字」「知識」「教養」において有効な手段となるはずである。

飛行機が離陸する際、推進力を付けるため大量の燃料を必要とするように１台の図書館車に対してサービス人口に見合う図書を投入することが重要である。



ELETの移動図書館のポスターより

TAAA（アジア・アフリカと共に歩む会）南ア移動図書館車活動報告

野田　千香子

1997年１１月下旬に南アフリカを訪問し、確認してきた事を含めて、活動の近況を報告します。中古の英語の本は大変役に立っていて、まだまだ何十倍も何百倍も必要であること。移動図書館車は歓迎されよく管理されていたこと。ＴＡＡＡがこれから先、送る移動図書館車には南アの州の行政も注目していて、これらの移動図書館車を使った図書活動を展開しようと動き出していることなどを具体的に報告したいと思います。

（１）概況

◇中古の英語の本

南アへ送った総数（５年間）

１１万３７４９冊

1997年１月～１２月　１万３１７６冊

（ダーバンへ3971冊　ベノニへ1086冊

ケープへ6350冊　その他数ヶ所）

◇中古移動図書館車

南アへ送った総数（３年間）　７台

1997年１０月の３台はベノニへ１台

ケープへ２台

◇移動図書館や本の主な受取り先の近況

・ＭＥＩ（Methodist Education Initiative）

ジョハネスバーグより30キロのベノニ市

- 以前に送った１台がベノニ市デベトン地区のデベトン中等学校を基地として小中学校へ巡回貸し出しを行なっている。
- 今回の２台目の車は１１月に無事到着し、ＭＥＩの代表宅に一時保管されている。

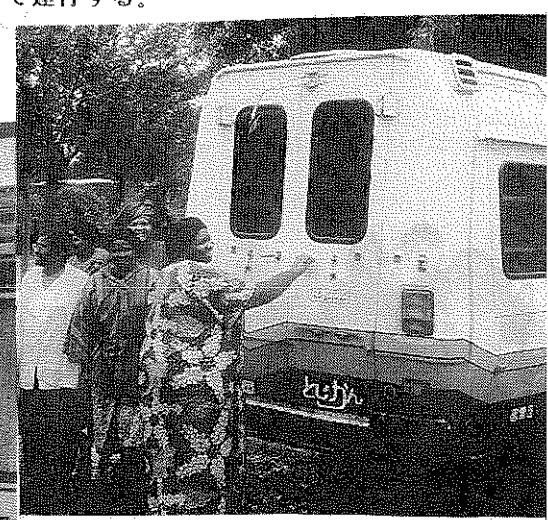
・ＥＬＥＴ(English Language Educational Trust) ダーバン市

- ２年前に送った１台は数100キロの広域を大活躍している。ＥＬＥＴの事務所から地方の教員指導のための教材や図書配布に使用。
- 昨年送った１台はジョハネスバーグの北ピーターズバーグ（500キロ以上）周辺で移動図書館車としてＥＬＥＴの指導の下に使用される。

・マシフンデイス（Masifundise）ケープタウン市

- 今回初めて移動図書館車２台(所沢市で使用していたもの）を送る。

果物の産地でセレスと、海岸の町エルマナス（ケープタウンより120～160粁)の各自治体（町）がマシフンデイスの指導で移動図書館車として運行する。



セレスの町に到着した図書館車

（２）現地の模様

ＴＡＡＡとのプロジェクトの見通し

（ａ）ケープの場合

コミュニテイと現地ＮＧＯが管理指導

１１月１５日土曜日、TAAAのパートナーであるマシフンデイスの主催の下にTAAAが送ったバス２台の贈呈式が行なわれた。ケープタウン市のソロモン市長の手でセレス町とエルマナス町へ贈与された。この日に間に合うように南アを訪問できなかった私たちは、TAAAからの挨拶文をケープ在住の福島康真さん（NGO,AIDC)に代読してもらった。大変盛大な式典であったようだ。

南アに到着したTAAA３人と図書館司書の４人は１１月２１日マシフンデイスのスタッフと共に美しい山々に囲まれた果物の産地のセレスを訪ねた。１昨年この地を訪問し、町会議員やTCOE(Trust of Christian Outreach and Education,NGOの全国組織、マシフンデイスも構成団体の一つ）の現地活動家と会議を持ち、移動図書館車のプロジェクトを夢のように語り合ったことがあった。それが今ここに実現したのであった。

朝早くケープを出発した私たちはロッキー山脈を思わせる壮大な山地を越えて午前中にセレスに到着した。高い建物などはない落ち着いた高原の町外れの小さなコミュニテイセンターで再び会議を持った。着いたばかりのバスを大歓迎し、その使い方について討議が行なわれた。学校を回る移動図書館としての役目が第一義。その他、識字学級や職業訓練や生活指導などの教材運びにも使いたい、ということであった。日本では移動図書館としてのみの使用に限定されていたが、私たちとしては、喜んで賛意を表した。

巡回に使う本はまだまだとても十分に揃っていないので、いくらでも送ってほしい。特に小学生が読む本、成人の識字に使う日本の中１、中２の英語の教科書、実用書（洋裁、育児、衛生など）がほしいということであった。

車は、自動車工場に保管されていて、預かっている工場の人たちもそれを誇りに思って大切に扱っていることがわかった。

セレスにおける貧富の差も大きい。黒人達の多くは拾ってきた木切れを寄せ集めた天井の低い隙間だらけの掘っ立て小屋に住んでいる。中の一つに入れてもらったが、新聞紙が壁替わりにひらひら貼ってあった。住宅公庫など、を利用して建てたこじんまりした住宅も少しではあるが、見ることができた。

ケープを中心にした移動図書館のもう一つの送付先はエルマナスである。翌日ケープから１６４キロ離れた海岸の町エルマナスを訪ねる。鯨の見える海岸として有名な観光地で美しい別荘やホテルも多い。ちょうど土曜日であったため、多くの白人の観光客が鯨見物に来てにぎわっていた。

しかしこの町の黒人居住区にいってみるとその貧しさは海辺の観光地とは対照的であった。ここも家とは呼びがたいような廃材で作った隙間だらけの小屋が並んでいる。埃っぽい未舗装の家々の間を通りながら、一日も早く移動図書館がここの子供たちや大人達の役に立ってほしいと心から願った。

ここでもコミュニテイセンターに、町の議員、TCOEの活動家、マシフンデイスのスタッフ、地元の司書などが集まり、私たちと今後の運用について話し合った。　学校を回ってまず子供たちを通して、地域の大人たちにも本の存在を知らせていく方法を取る。今現在は町の公民館が保管場所になっている。

エルマナスのコミュニテイセンターでの会議

すきま風を新聞紙で防いでいる家（セレス）

（b）ダーバンとピーターズバーグの場合
NGOがコミュニテイと共同で運用

ダーバンのELETについては毎号報告しているので詳しくは述べないが、2年前に送ってある大活躍中の小型図書館車のほかに昨年送付した移動図書館車を今回、ピーターズバーグで学校巡回図書館車として使用することになった。

11月24日、ピーターズバーグ（人口20万人）のELETのインプリメンター（現地活動家）が2人で夜行バスをジョハネスバーグで乗り継いで午前中にダーバンに到着した。彼らはELETへのTAAAからの2台目のバスをピーターズバーグへ移動するためにやってきたのであった。2人の若い男性の活動家は、当地での移動図書館活動の必要性と感謝の意を熱っぽく語った。翌日彼らは交替で運転して10時間位かかってピーターズバーグへバスを乗り入れる予定であった。そこでは移動図書館がELETの指導と管理の下にコミュニテイの協力で運行されることになっている。私たちは来年はぜひピーターズバーグを訪れたいと思っている。

（c）デベトンの場合

最後にジョハネスバーグ近郊のベノニ市のデベトン地区を訪ねた。

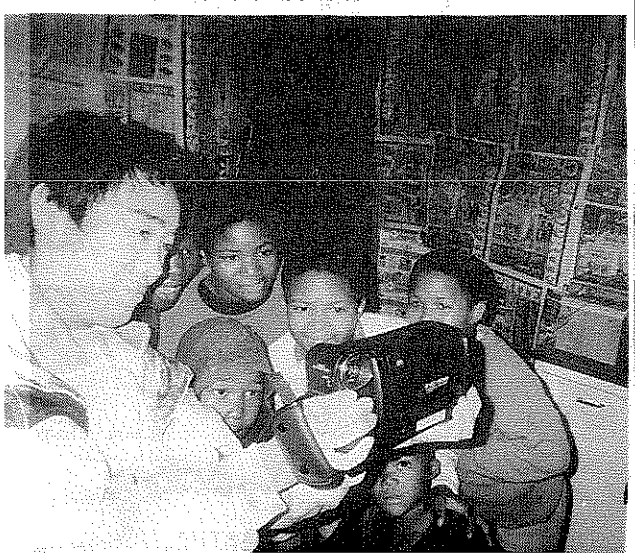
デベトン中学校には昨年、移動図書館のベースとなる建物とガレージが郵政省のボランテイア貯金からの配分金の援助も得て建てられた。完成したばかりの建物の落成式に参加したのがちょうど1年前であった。

今回訪れて見たのは、すっかり整備された貸し出しシステムと書棚であった。ちょうど南アの学校は試験期間にあたっていたので学校巡回は休んでいたが、専門の司書マーガレット・グレイヤーが　貸出のシステムを説明してくれた。学校を巡回する際は教師が本を選び、借りる。この際はコンピューターのコードを使って管理する。教師は本のポケットのカードを用いて生徒に貸し出す。生徒数に対してスタッフとバスが不足している段階では、直接生徒がバスに乗り込んで借りることは難しい。同行した北爪司書も今の段階ではこれが最善の方法であるとの見解であった。

本はまだ不足していてデベトンに40の学校があるが、今のところ数校を回るのが限度であるということであった。スタッフはベノニ市の私立セントアンドリュース学校内のセントアンドリュース財団（ボランテイア団体）が司書やアルバイターを送ってくれている（時給は支払われているがボランテイアに近い）。またベノニ市の教育課から派遣されている元教師もいる。彼らが交替で本を整備し貸出業務に当たっている。その中心になっているのが、MEIのメンバーでセントアンドリュースのメンバーでもあるマーガレット・グレイヤーである。

スタッフたちは黒人も白人も一緒になって図書館がうまく運行するよう懸命に力を合わせて働いていることがうかがい知れた。後は少しずつ本が増え、行政の協力が得られていくに従ってますます充実していくことが予想される。さらに本年度は、郵政省から本の購入費も配分されているので、これによって、南アで出版されている本を彼ら自身で選んで購入してもらうことになっている。冊数はこの地域に数百程度であるが、民族語の本やあるいは日本で集まりにくいが必要であるという本のリスト作りを今彼らが行なっている。

左の家にて、ビデオに集まる近所の子どもたち。



ピーターズバーグから図書車を引取に来た2人の活動家
（ダーバン ELETにて）

（3）今後の動き

南ア行政が動き出す

アパルトヘイト時代に南アフリカの人々の生活を支えてきたのは、小さな地域のコミュニテイセンターも含めた南アのＮＧＯであった。1996年頃で国内にＮＧＯの数は５万あると言われた。

国外からの援助が減ったり、中心となるリダーが議員に選出され、縮小したり解散に追い込まれたＮＧＯもあるが、今なお民主的な国の建設の推進役としてＮＧＯの果たす役割は他の国と比べると非常に大きい。例えばダーバンのELETがクワズールーナタール州や東部ケープ州その他で果たしている教員指導や教材制作や図書指導などを目の当たりに何回も見てきている私たちには、その実績と効果の大きさが実感できるのである。

国や地方自治体は、ＮＧＯと上手に共同したり、援助したり、時にＮＧＯから学んだり逆にＮＧＯを指導したりということが望まれている。が、しかし現実には、ぎくしゃくしたり援助が届かなかったり、という話をあちこちで聞く。

こうした中で移動図書館は南アの行政の注目を引き始めている。まず地方自治体であるセレスとエルマナスの町が移動図書館の運行を決定したこと。ベノニ市の教育課（教育委員会）が一部を援助していること。もう一つの今回の一番大きな収穫とも言える出来事はジョハネスバーグを含むハウテン州の教育局の図書情報サービスという部署の部長およびスタッフと会議を持ったことである。

訪問以前から、MEIとTAAAの共同のプロジェクトには、図書情報センターは関心を寄せており、MEIの会議に出席したり、司書を応援に出したりしてきていた。今彼らが制作している第７次学校図書館対策のプロジェクトの重要な項目として移動図書館がある。これに日本から送られる中古移動図書館車を使用していくことになるという。移動図書館を必要とする地域はハウテン州だけで10数ヵ所ある。

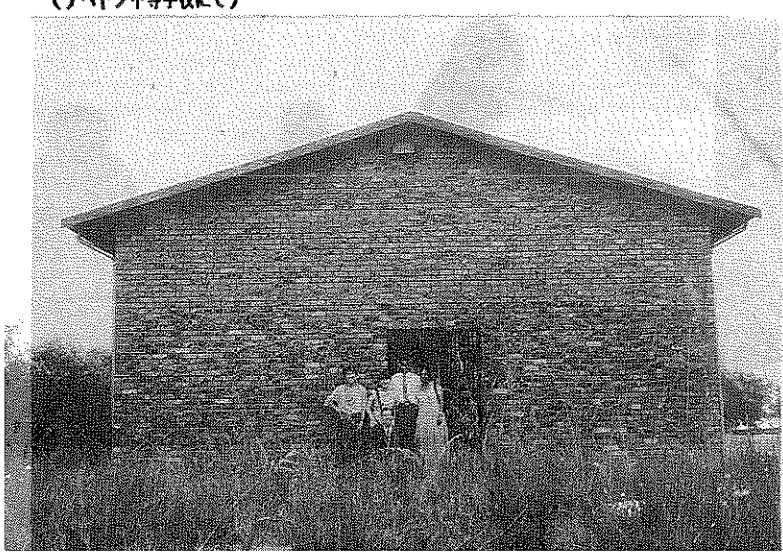
これは州の教育プロジェクトの一環であるから、これからハウテン州が受け入れる車については全面的に州の予算で運行するという。

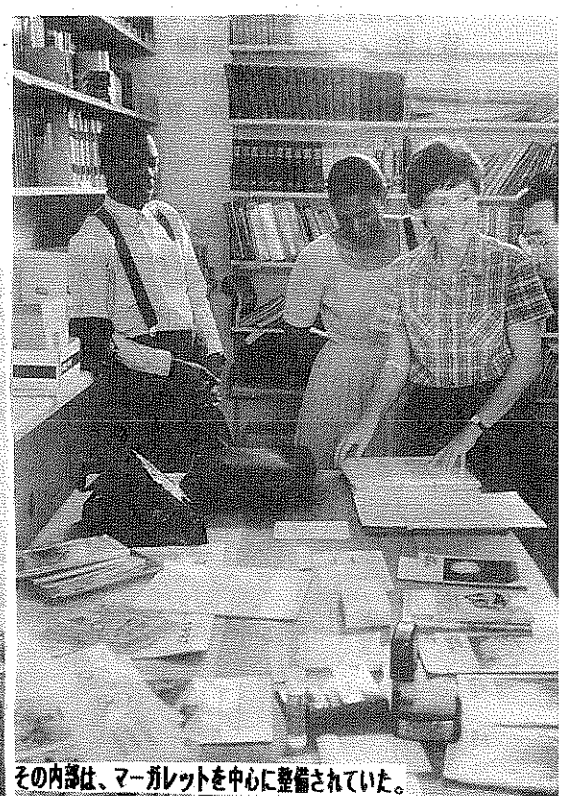
私たちにとっては願ってもない話であった。車を送ることはできても、移動図書館が増えていくと小さな市民グループであるTAAAには維持費の援助が続かないことに頭を抱えていたからである。

その上にうれしいことは、南アのＮＧＯと行政がうまく共同したり、影響し合ったりするきっかけ作りをすることができたということである。1998年にはさっそく、すでに廃車の予定の決まった移動図書館車がある。その話をすると、有能そうなエスドレイ・ケラー部長はじめ数人の熱心なスタッフたちの顔は喜びで輝き、どよめいた。

車を中心に報告してきたが、今後も英語の中古の本はいくらでも、ますます必要になってきている。ハウテン州ではイギリスからも英語の本の寄贈を受けることになっているが日本でも本収集はどうか続けてほしいということであった。

TAAAの支援で建てた移動図書館のベースの建物
（デベトン中等学校にて）





その内部は、マーガレットを中心に整備されていた。

南アフリカ再訪記

下谷房道

最初に南アフリカを訪れたのは1994年３月選挙の行なわれる前である。約３年半目になる。その時はジョハネスバーグのANCの事務所が襲撃されたり、我々の訪問先が治安の悪化のため変更になるようなことがあり、緊張感を覚えたものだった。今回は南アの人々の表情も町の雰囲気も落ち着きが感じられた。ダーバンの海岸で泳ぐ人々を見ても３年半前は黒人の姿を見ることはほとんど出来なかったが、今では当然の風景である。アパルトヘイトという制度がもともと不自然きわまりないものであったのだ、と改めて感じた。しかし、黒人の中で富裕な人々が出現した一方、電気、ガス、水道のないあの黒人の住居群はまだいたる所で見ることが出来る。初夏とはいえ、高地であるせいか、震える程寒い風が吹くこともある。小屋の内側に新聞紙を貼っていたがすきま風を防ぎ切れるものではない。この国のバランスの悪さはまだ是正されていないのだ。

「アパルトヘイトはまだ終わっていない」ということばも依然聞かれる。

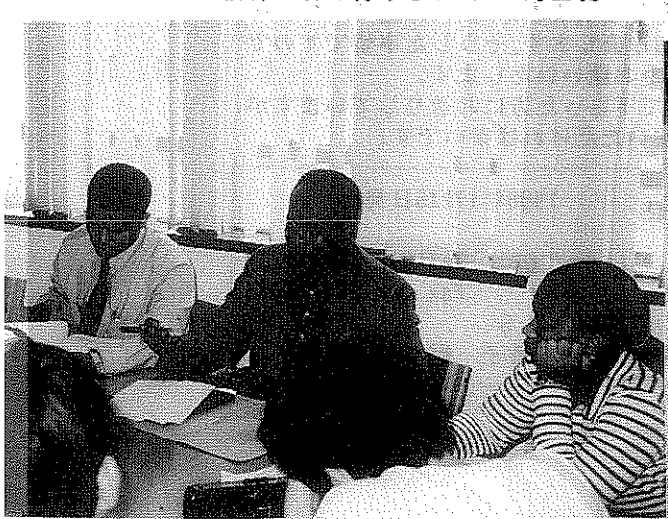
ダーバンでは教師に授業のやり方を指導しているELETのメンバー、ジュリアの行う授業を見学した。まず、生徒にストーリーのある一連の絵を提示し、思うこと、感じたことなどを発表させていった。生徒は絵を食い入るように見つめている。なんだろうとイマジネーションを膨らませ、自分の意見をどんどん発表していき、教材に引き付けられていく。生徒の目がいい。覚えさせることを中心にやっている日本の授業では出会うことが出来ない目である。生徒の発表は取り上げられ一つ一つ吟味された。いろいろな考え方が出た後で、先生は一冊の本を取出し、ストーリーを読み始めた。教室の中は「なるほど、そういうことだったか」という雰囲気になる。テーマは貧困や暴力についてであった。

絵も本も先生が持ってきたものだけ。生徒の机の上にはなにもない。教室のガラスは所々破れている。

同じ種類の日本の英語の教科書がたくさんあれば授業で使いやすい。日本の中学校、高校用の英語の教科書は大変有用なのだと言っていた。

また、火災の後を修理できずにいる学校もあり、そういう方面での援助もできないものだろうか、と思った。学びたいと思っている人の前に横たわっている困難は日本では想像できないほど多い。日本の子供たちは十分過ぎるほど恵まれた教育条件の中にいながら閉塞状態の中にいるように思われる。日本と南アフリカが交流することは日本の子供たちにとっても意義のあることのように思われてならない。

南アフリカは広い国である。この広大な国で移動図書館車を見ると、その重要性が改めて認識される。図書館車は100キロメートル以上離れた場所にも１時間ほどで着く機動性を



学校設備の窮状を訴える地域の活動家タミイたち
（ダーバン ELETにて）

一度、壊れたガラスは何年もそのままのサウエラ小学校
（ダーバン郊外にて）

もつ。また、南アではいまだ人種別に住み分けていることが多いから、図書館はあっても人種別の地域に分かれて建っている。図書館車は地域をまたいで活動し、その交流に大いに役立つものと思われる。

移動図書館にも学校の図書館にも本はまだ少ない。これから先も本を送っていくことが重要な課題であることは間違いない。

南アフリカでは英語は日常的に使用され、英語を理解しないと受け取る情報が大変に狭くなってしまう社会である。英語の学習は日本における英語の勉強とは意味がまったく異なる。英語の文字を獲得することにより、黒人たちの生活の向上は実現性を帯びるといってもいいように思われる。

しかし、図書館車には数種類の現地語の本も少部数ではあるが載っていた。これらの本は日本では調達できないものであり、また英語の本でも、日本で集めにくいが必要であるというような南アの作家の本などを彼らが選んで購入できる資金を用意することも重要である。幸い今年はそうした資金援助も出来そうである。

とにかく、子供たちの笑顔は明るいし、アパルトヘイトと戦ってきたＮＧＯやコミュニティの人々は優しく、そして力強い。これからもっと発展していく国だろう。私たちも小さなＮＧＯとして息長くともに歩いていきたいと思う。

南アフリカ直輸入ルイボスティー販売のお知らせ

「ルイボスティー」は、南アフリカ共和国の山脈地帯にのみ栽培されている健康茶です。無農薬で自然発酵により作られており、ノンカフェインでタンニン低量なため、赤ちゃんから高齢者まで安心して飲めます。最近話題になってきているこのお茶は、ミネラル等を多く含むだけでなく、アトピー等のアレルギーを抑制する優れた効果があるといわれています。また、老化を促す活性酸素を排除する作用があります。紅茶やコーヒー代わりにお楽しみ下さい。テイーパック１袋でカップ約３倍分。

「ルイボスティー」１箱８０パック入り
１箱２，０００円（税金込み）

・５箱以上は送料無料、４箱以下一律500円。
・氏名、電話、住所を書いてFaxまたははがきで会までお申し込み下さい。
・ご注文後、お茶と一緒に振込み用紙をお送りしますので、会宛に振込んで下さい。

★報告会のお知らせ　２月１５日（日）２時～４時　埼玉県労働会館（京浜東北線北浦和駅西口下車徒歩５分）当日、南アフリカ訪問のビデオと写真展示も行います。詳しくは当会へご連絡下さい。参加費500円。

◆多くの方から英語の本をいただき、感謝しています。本は一旦近くの倉庫へ保管して月に一回位集まって荷を解き、梱包し直します。そうした事情ですので手紙や寄付金などは別便でお送り下さるようお願いいたします。

◆ニュースレターは会にこれまで協力して下さった方にお送りしていますが、ご不要の方は電話、Fax、ハガキなどでご一報いただければ幸いです。

自由南アフリカの声　　第１６号　　1998年1月15日発行
発行所　アジア・アフリカと共に歩む会

郵便振替：「アジア・アフリカと共に歩む会」００１００-４-６０８５１５
発行人 野田千香子　編集人　久我祐子